

二 統一国家への道

邪馬台国と 弥生時代の長期間、福岡市志賀島で発見された三角縁神獸鏡 た「漢倭奴国王」と刻まれた金印を持ち出す

までもなく、中国の史書に記された内容や考古学的事象からみて北部九州の国々が当時の前漢・後漢帝国とほぼ独占的に交流を行っていた。しかし、二世紀後半から三世紀初めにかけて作られた画文帯神獸鏡という銅鏡がもたらされたころを境に、それまで北部九州にあった舶載鏡の分布の中心が畿内へ移動した。弥生時代の墳墓に多く副葬され、古墳時代にも非常に愛好された特別の意味をもつ銅鏡の分布の変化は、畿内の勢力が対中国との交渉の主役、日本列島の主導者となったことを示している。(図2—70、岡村秀典『三角縁神獸鏡の時代』一九九九)。

有名な『魏志倭人伝』によると、邪馬台国の卑弥呼は、「倭国乱」の後に倭国の女王に共立され、二二九九年に魏王朝へ使者を出した。「倭国乱」の時期は『梁書』によれば「漢靈帝光和中(一七八—一八四)」とあって、一九〇年ごろにはすでに卑弥呼の下に倭国が成立していたと考えられている。つまり、中国製銅鏡の研究から導かれた北部九州から畿内へという権力中心の移動は卑弥呼の時代に合致するのである。画文帯神獸鏡は、後に魏に滅ぼされる公孫氏が邪馬台国を承認して、卑弥呼へ与えた銅鏡と考えられている。

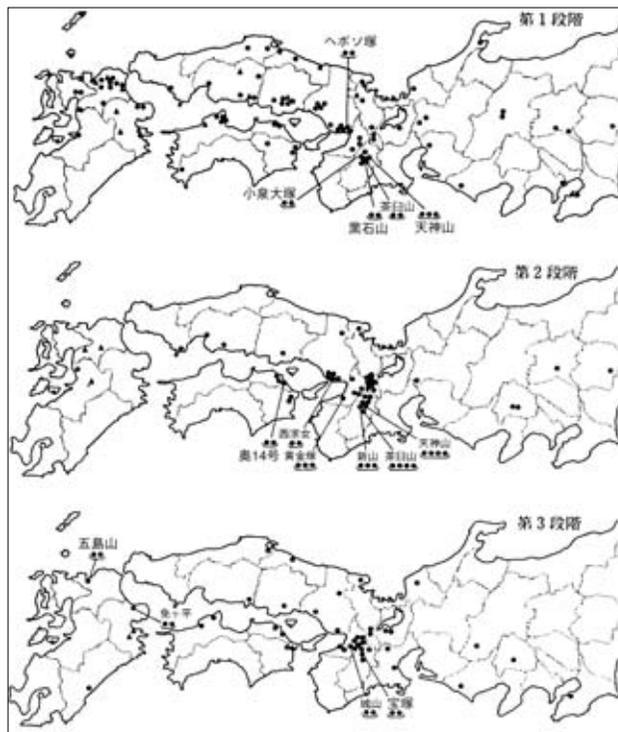


図2—70 2世紀後半から3世紀前半に造られた中国青銅鏡の分布
●：完形鏡 ▲：破鏡 (岡村秀典『三角縁神獸鏡の時代』より)

魏王朝は卑弥呼へさまざまな下賜品を与えたが、その中に銅鏡一〇〇枚が含まれていた。卑弥呼が朝貢した「景初三年（二三九）」、その翌年の「正始元年」の銘文をもつものがある三角縁神獸鏡（図2—71）がその最有力な候補である。しかし、この種の鏡が中国大陸や朝鮮半島から全く出土しないことを理由に、多くの論争がなされ、今も続いている。国産鏡である、あるいは大陸の鏡作りの工人が当時の日本へやってきて鑄造したなどの非魏鏡説があるが、大方が認めるのは魏が卑弥呼へ下賜するために特別に鑄造した鏡であるという説であろう。

三角縁神獸鏡はすでに四〇〇面ほどが出土しているが、魏への遣使は正始四・六・八年に続いて、卑弥呼の死後にも二ないし三度行われており、記録にないものも想定すれば銅鏡の総数は大きな問題ではない。より重要なことは卑弥呼朝貢とその答礼使派遣という倭国にとって記念すべき年号鏡が複数存在することである。

この舶載三角縁神獸鏡は関東地方から宮崎県にいたる広い範囲で出土し、中に同じ文様をもつもの（同範鏡、近年では同型鏡と呼ぶことが多い）が一四〇種類ほどある。複数の古墳が同範鏡を共有する事実を追求した小林行雄は、各地の首長が独自に中国王朝と交渉して偶然に生じた結果とするよりも、一元的に入手した首長が各地の首長に分配（下賜）したと考える方が妥当であると解釈した。卑弥呼ははじめ公孫氏を頼ったが、公

孫氏滅亡後には魏王朝を権力維持の後ろ盾とした。各地の首長もまたその初期においては、卑弥呼に象徴されるヤマト政権から三角縁神獸鏡を受け取ることによって政権への参入を認められ、地域の支配者に承認された証しとして前方後円墳を造り始めたと考えたのである（「古墳の発生の歴史的意義」『史林』三八—、一九五五）。

日本の古代国家成立に重要な意味をもつ前方後円墳の誕生という転機に関わって、三角縁神獸鏡に付与された歴史的意味が非常に大きいだけに、その製作地や銅鏡一〇〇枚に関わる問題もまた重要視されているのである。

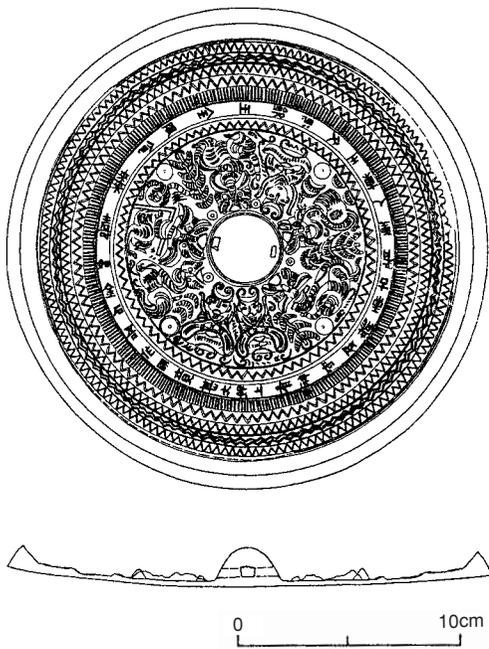


図2—71 三角縁神獸鏡
（福永伸哉『邪馬台国から大和政権へ』2001より）

前方後円墳の発生

前方後円墳という名称は江戸時代の国学者蒲生君平が名付けたもので、彼は貴人の乗る宮車の側面観を模倣した形態、つまり後円部は円蓋をかかげた輿の部分、前方部は引き手を擬したものと考えた。その後もこの特異な形状の由来が考えられたが、現在では弥生時代の円形墓からの形態変遷がおおよそたどれるようになってきた(図2-72)。しかし古墳との間にはなお越えがたい一線がある。

弥生時代から引き継がれた要素として、岡山県地方などで使用された堅穴式石

室や特殊器台・特

殊壺といった祭祀

土器、山陰地方で

採用された葺石と

いう墳丘を装飾・

保護する技法など

があり、鏡・剣・

玉を副葬品として

重視してきた北部

九州の風習といっ

たものも含まれて

いたのかもしれない。

しかし墳丘の

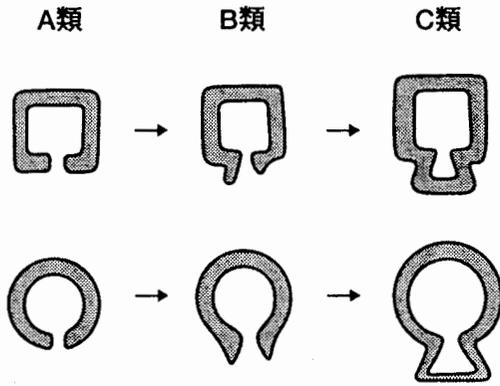


図2-72 前方後円(方)墳発生の様式図
(白石太郎『古墳とヤマト政権』1999より)

巨大化、長さ五段を優に超える長大な割竹形木棺とそれを納める板石積みみの堅穴式石室、銅鏡や鉄製品的大量副葬などといった弥生墳墓との差別化が強く意図されていた。かつ、古墳の上では亡き首長の葬送に伴って、これも新しく創造された首長権を継承する祭祀が執行されたと推測されている。

地域性をほぼ消し去り、広範な地域で同じような内容の前方後円墳が造られ、祭祀が行われた。この変化の背後に新しい政治体制の成立を読みとるとき、それは邪馬台国を中心にとまった倭国の成立した時代が重要な意味を持つといえるだろう。

最古の 昭和二十年代に小林行雄は、副葬品として舶載前方後円墳 鏡だけを持ち、仿製鏡や碧玉製腕飾類をもたない一群を最古の古墳として抽出した(『前期古墳の副葬品にあら

われた文化の二相』『京大文学部五〇周年記念論集』一九五六)。同四十年代には、岡山県地方を中心として弥生時代後期に特異な発達を遂げる特殊器台・特殊壺の変遷を追った近藤義郎らによって、これらが古墳の主要な構成要素である埴輪へと連続的に変化することが突き止められた(図2-73、近藤・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』一三―三、一九六七)。

その後も近藤らは精力的に最古の古墳を追い求め、ついに特殊器台から円筒埴輪への過渡的な土器をもつ兵庫県権現山五一号墳(前方後方墳、四三三)において、舶載三角縁神獸鏡五枚

を発掘した。ここで、弥生時代の祭祀土器に系譜をもつ埴輪と最古の古墳の要素であった船載鏡（三角縁神獸鏡）が初めて出会い、それまで「突如出現した」と考えられていた前方後円（方）墳が弥生時代からのタイムテーブルに位置づけられることとなった（権現山古墳調査団『権現山五一号墳』一九九一）。

実は、権現山五一号墳から出土した最末期の特殊器台・初現期の埴輪は、それ以前に奈良県箸墓古墳などでも出土し、注目されていた。これらの出土土器や、前方部が大きく撥形に開くという墳形の特徴などをもって、全長二八〇センチほどの箸墓古墳を最古の前方後円墳と位置付ける説もあったが、なお土器と副葬品の組合せが不明であったために説得力を欠いていた。

近年、小林・近藤らとは別の視点から最古の古墳を定義する見解が出されている。纏向型前方後円墳と名付けられた、ややいびつな後円部とそれに比べて比較的短く端部が開いた前方部をもつ一群である。岡山県楯築遺跡を起源として三世紀前半に奈良県纏向遺跡で誕生し、福島県から鹿児島県にいたる広域で造られ、やがて「定型的」な前方後円墳が成立するさきがけと考えられている（図2-105、寺沢薫「纏向型前方後円墳の築造」『王権誕生』一九八八）。

ただ、提示された遺跡には、三角縁神獸鏡を出土する前方後円墳も含まれており、奈良県ホケノ山古墳を除く纏向古墳群の主体部や副葬品が不明なこともあってそれらの位置付けについ

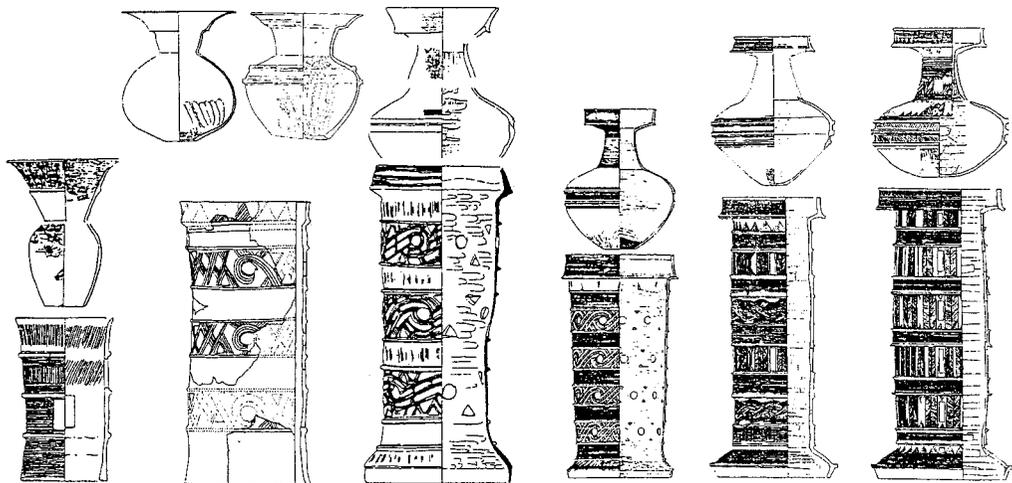


図2-73 特殊器台から埴輪へ
 (近藤義郎「埴輪の起源(2)」『垣間見た吉備の原始古代』1997より)

ては評価が定まっていない。

纏向遺跡と 纏向遺跡は奈良県桜井市北部に位置し、盛期は
 その周辺 一・五[㊦]四方にも及んだ当時国内最大規模の集
 落遺跡と推測されている。断片的な調査の中で、両岸を矢板で
 護岸した幅五[㊦]、深さ一[㊦]ほどの溝や柵列に囲まれた掘立柱建
 物跡などを検出したが、遺跡の詳細はまだ不明な部分が多い。
 ここから出土した土器には、南九州から南関東にいたる広範な
 地域から持ち込まれたものがあって、その割合は一五%に及ぶ
 という。それ以前は各地域でほぼ完結していた土器の分布状況
 からすれば、この時期に非常に大きな社会変化が起きたことが
 予想される。変化の具体像はまだ不明な部分が多いが、ここでも
 邪馬台国を盟主とする倭国の誕生が、契機となったことが十分
 想定されるのである（橿原考古学研究所『纏向』一九七六）。

数年来、奈良県立橿原考古学研究所では、古墳時代初期の王
 墓が集中する奈良盆地東南部で、古墳の発生や初期王権の実体
 解明を目指して発掘調査を実施してきた。三二面の三角縁神獸
 鏡を埋葬時の状態で確認した天理市黒塚古墳に次いで、纏向型
 前方後円墳の桜井市ホケノ山古墳の発掘調査に着手した。

ホケノ山古墳は全長八〇[㊦]、後円部径約六〇[㊦]、同高約八・
 五[㊦]、前方部長約二〇[㊦]、同高約三・五[㊦]の規模をもち、周
 濠・葺石が設けられた、外見上はごく一般的な古墳である。し
 かし、埋葬部は長さ五[㊦]、幅（直径？）一[㊦]のコウヤマキ（高

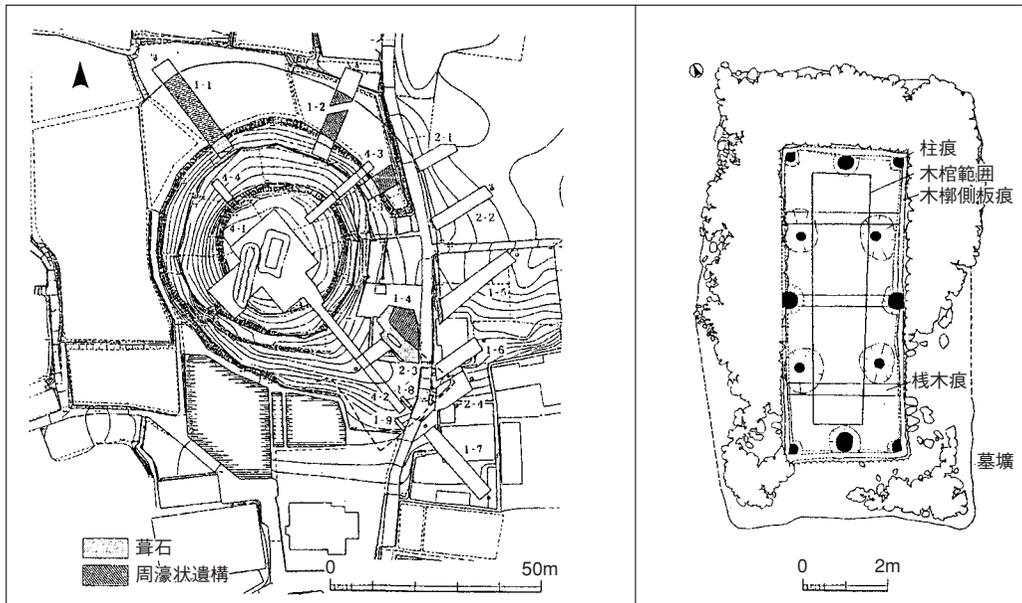


図2-74 奈良県ホケノ山古墳
 (奈良県立橿原考古学研究所『ホケノ山古墳 調査概報』2001より)

野槨) 製刳拔式木棺(舟形木棺)を、六・五×二・六の規模で板材を横積みした類例のない木槨に納め、天井板を内部の六本の柱で支えたものと推測されている。更に、その外周に厚さ二メートルほどの川原石を積み上げ、天井の上にも厚く石積みがなされてきたようである。調査者が「石囲い木槨」と呼称する特異な主体部構造であった(図2-74)。

出土品には舶載画文帯神獸鏡一枚、二枚分の内行花文鏡小片、銅鏃七三点以上、鉄製品(柄頭を環状とする素環頭太刀一点、太刀一点、劍六点以上、鉄鏃七五点以上、斧のような形状の鏃形鉄製品一点、鉞二点以上、鑿二点以上、への字形となる小型鉄製品一八点以上)、そして墳頂に並べ置かれたと考えられている装飾豊かな壺形土器(庄内式)や小型丸底壺(布留式)などが出土した。別に、このホケノ山古墳出土と伝えられる銅鏡が三枚ある。二枚は國學院大學蔵の二種類の舶載画文帯神獸鏡、そして桜井市大神神社蔵の舶載長宜子孫内行花文鏡である。これが事実であれば、この古墳には画文帯神獸鏡三枚を含む六枚の銅鏡が副葬されていたこととなる。通常、複数の舶載鏡を出土する初期の古墳では三角縁神獸鏡を主体とするものがほとんどであり、銅鏡の構成も非常に特異なものとなる。

木槨は岡山県楯築遺跡で約三・五×二・〇メートルほどの規模のものが推測されているほか、岡山・島根両県下などで数例が知られていたが、前方後円墳では初めてである。初期の古墳に一般

的に使用される割竹形ではないが、長さはそれに匹敵する刳拔式木棺を使用することも重要であろう。出土品に関しては三角縁神獸鏡を全く含まないが、弥生時代にはみられなかった多くの刀劍・鏃の副葬とそれらの形状も通常の初期古墳から出土するものに共通するなど、このホケノ山古墳はまさしく古墳時代の文化的内容を示し、かつ定型化する以前の様相をも併せ持つ最古式の古墳と位置付けられた。また、出土した木棺を放射性炭素(¹⁴C)年代で科学的に分析した結果、九五%の確率で紀元三〇〇〜二四五年の中に収まるといい、出土した銅鏡が三世紀代に製作されたと考えられることを併せてこの古墳の築造年代は三世紀中ごろと推測された(奈良県立橿原考古学研究所『大和の前期古墳Ⅳ ホケノ山古墳 調査概報』二〇〇一)。前方後円墳と卑弥呼の時代が交錯する科学的根拠が得られたのである。現在のところ、確実な前方後円形の墳墓の最古例といえる。

ホケノ山古墳に次いで造られたと考えられている古墳が『日本書紀』に昼は人が作り、夜は神が作ったと記される奈良県橿原古墳である。実在が推測される最初の天皇(大王)である崇神天皇の叔母、倭迹迹日百襲媛の陵墓として宮内庁によって管理されるために自由な立ち入りはできない。しかし、その墳丘から出土した吉備地方の系譜を引く特殊器台などが紹介され、前方部の先端が三味線撥形に開くなどの形態上の特徴もあって多くの研究者が最古の古墳の一つと認めている(図2-1

75。

西日本を中心に造られた初期の古墳とされるいくつかの古墳を第7図に示した。これらは古備系の特殊器台の系譜上にある土器を出土した、あるいは三角縁神獣鏡を中心とする船載鏡を出土し、仿製鏡や碧玉製腕飾類を出土しない古墳である。表をみて一目瞭然であるが、箸墓古墳の規模は圧倒的で、最初の大王墳といわれる所以である。そして、箸墓古墳はホケノ山古墳の西に近接し、いずれも纏向遺跡に接する位置にあることが相互の歴史的評価を更に高めているのである。

古初期古墳の分布 初期の有力な古墳は図2-76に示したように、奈良盆地と瀬戸内海の周辺部に集中する。もち

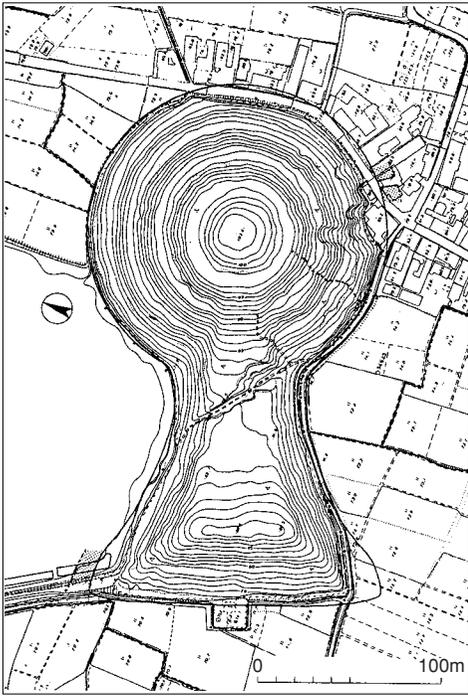


図2-75 奈良県箸墓古墳
(白石太郎『古墳とヤマト政権』1999より)

▲ 三角縁神獣鏡の出土枚数を示す

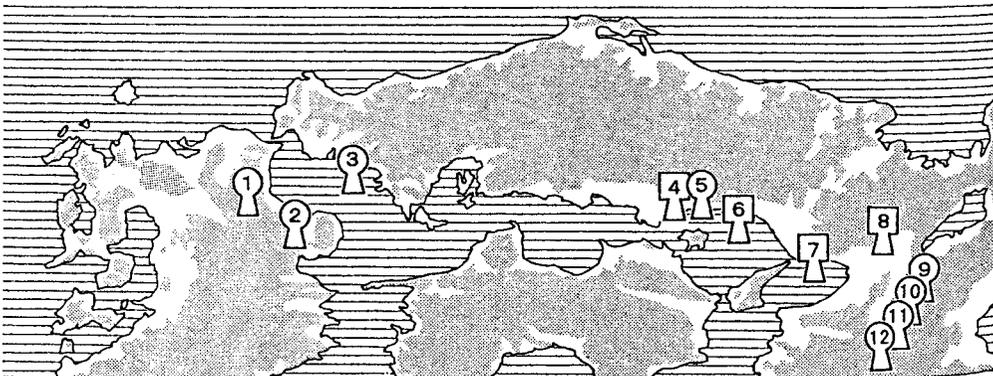
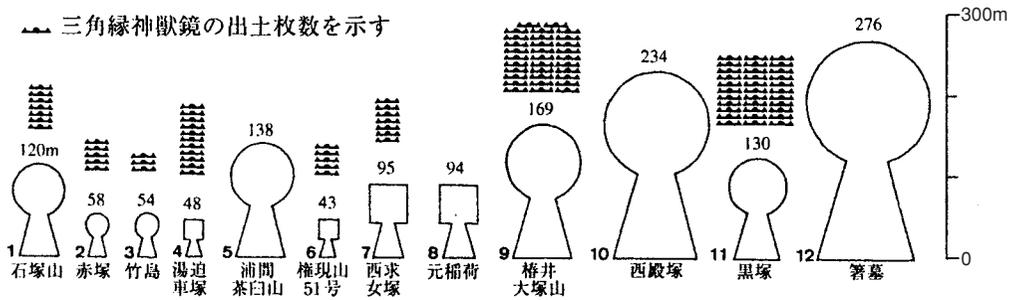


図2-76 初期の有力前方後円(方)墳の分布
(福永伸哉『邪馬台国から大和政権へ』2001より)

石室が主として使用される（図2-77）。多数の銅鏡を出土して古墳文化研究に重要な材料を提供した京都府椿井大塚山古墳は全長一七〇メートルほどの前

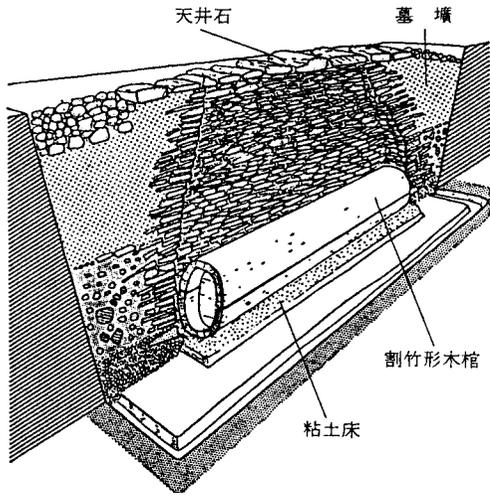


図2-77 竪穴式石室の構造と名称
 (都出比呂志「前方後円墳の誕生」『古代を考える 古墳』1989より)

ろん、これらは現在までに判明した古墳であって、今後も同じような内容の古墳が発見されることは当然予想されるが、分布状況はそれほど変わらないであろうと考えられている。ヤマト政権はもはや必要不可欠となった鉄資源や舶載鏡を独占的に入手し、地方首長へ配布することによってのみ権威を維持できた。それらの供給源である朝鮮半島や中国へのルート確保を死活の問題として重要視したからである。

初期ヤマト政権を構成した首長相互の関係を推し量る材料として古墳の埋葬部の形態をみてみよう。前期古墳の主体部にはコウヤマキを選択的に使用し、それを削り抜いて作った直径〇・六〜一メートル、長さ六〜七メートルほどの割竹形木棺を納めた竪穴式

方後円墳で、石室の長さが、六・八メートルであったのに対し、全長九四メートルの京都府元稲荷古墳は石室長五・六メートル、六枚の銅鏡を出土した兵庫県吉島古墳は全長三〇メートルに対して石室長は五・四メートルであった。墳丘規模に比較して石室規模の格差は小さいといふべきであろう。これは他の古墳についても当てはまることで、墳丘の大きさが権威の強弱の一面を表現するとしても、長大な埋葬部を必要とする共通の古墳祭祀の下、各地の首長も同程度の埋葬部を作ることが認められる関係であったことを示している。つまり、絶対的な支配・被支配関係を認めるのではなく比較的等質的、対等に近い関係であったと思われるのである。

土器の移動

弥生時代においては、甕棺墓の風習と同じように、日常的に使用する土器も一定の広がりをもつとはいえ、なお地域性を色濃く残していた。しかし、通常那馬台国の時代といわれる三世紀前半ごろの庄内式という土器が使用された時代になると、この種の土器が関東地方から北部九州まで点的に広く見られるようになる。土器分布域拡散には当然それを製作し、使用する人々の交流・移動が想定され、このころに汎列島的な社会変化が起こったことが予想される。次の布留式土器が使用されるころには列島内に面的に拡散し、それまで根強く維持されてきた地域性といったものがほぼ払拭されてしまう。そして、古墳から出土する土器の大部分はこの布留式土器である（図2-78）。

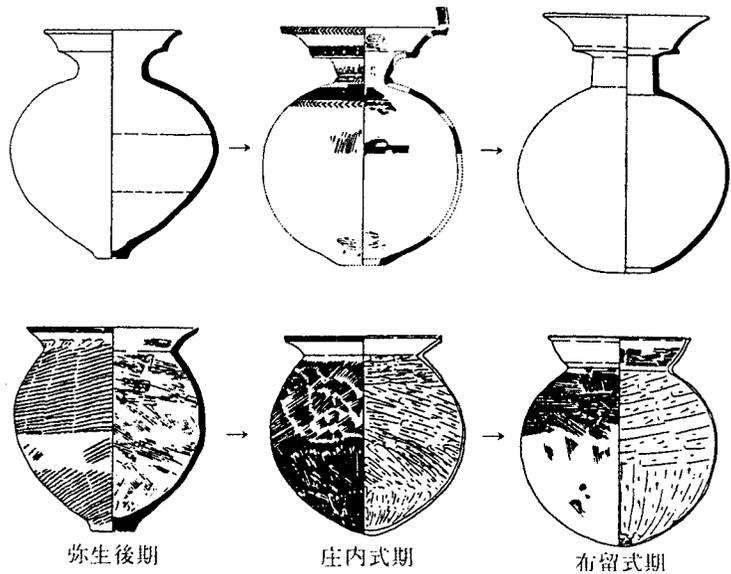


図2—78 畿内地方の弥生土器から土師器への変遷

(柳本照男「土師器成立にはどんな意味があるか」『新視点 日本の歴史 二・古代編I』1993より)

弥生時代の中核的集落の多くは幅五メートル前後、深さ二メートルを超える断面V字形の溝を巡らせた環濠集落であった。環濠の内外いづれかに掘削した土を積み上げて土塁を造っていたと推測されている。弥生前期から後期にかけての各時期の環濠が発見された佐賀県吉野ヶ里遺跡は代表的な遺跡で、これらの環濠集落は

防御的性格が強いことから、弥生時代後期のそれらが中国史書にいう「倭国乱」に直接関連する遺跡と考えられている。庄内式土器が使用されるころに各地の環濠は埋められてしまうが、この時に激しい戦闘があったという積極的な証拠はまだ少ない。西日本を広く巻き込んだと考えられる「倭国乱」の具体的痕跡はほとんど見られず、日常生活に最も身近な土器の急激な拡散が示すように、古墳文化の波及はかなり平和的に行われたと考えられる。ヤマト政権は選択的に各地の首長と取り結び、前方後円墳を点的に配することによって、地域に楔を打ち込み強圧的に勢力拡大を行ったのではないらしい。卑弥呼が共立されたと記す史書はその辺の事情も踏まえて書かれたものかもしれない。初期ヤマト政権は前方後円(方)墳に象徴される祖先祭祀を共有し、仮想的な同祖同族関係を結んだ首長らによる連合的政権であったと考えられている。

三 東アジア世界へ

海の正倉 沖ノ島は福岡県宗像市に属する孤島で、宗像大
院沖ノ島 社沖津宮が鎮座する。古来から我が国と朝鮮半
 島との間の航路上に位置するために海神が祀られてきた。神社
 関係者以外無人の島は厳しい戒律が敷かれ、現在でも上陸する
 前に海で禊を行う。

この島の出土品については、古く江戸初期から関心が払われ